

書 評

省エネルギーセンター発行

長谷川慶太郎著

「異端のすすめ」

評者 藤 本 枝 太*

Shigeta Fujimoto

本書の目的はハイテク時代における資源としての個性化社会に対処する人材開発と、生き残るための企業戦略に対する著者の自らの経験と斬新な思想に基づいて書かれたものである。

内容については新時代における企業経営は結局人的資源の合理的活用で、その手段として上司さらに経営者に至るまで過去における常識に捉われることなく、大きく変貌する社会に対して活躍する素質を持った個人の掘出しと、さらに将来大きい発展の可能性を潜在していると思われる個人の開発、指導、処遇その他についての積極的、発展的考え方である。

第1章は新しい経済と経営環境について、従来の少品種大量生産から多品種少量生産への移行に処して特に強調されることは、買手市場の到来とともに個性的な製品に魅力を感じる時代が到来する。その個性的製品は価格よりも自分の好みにウエイトが移り、その製品のアイデア、デザイン、製造、さらに販売に到るまでそれぞれ個人の個性から生まれるものである。

経営においても大企業も中小企業の集団となることから、人材の開発の必要性が叫ばれそのためには、人事担当者は思い切った自己反省すなわち平均的な人並でなく個性ある人材に焦点を当てる必要がある。それだけ経営者の人物の評価における責任は重くなる。

第2章は経営者の先見が全てを決めるもので、トップの資格、指導者としての条件などからみて、人材の開発としての仕事は大きい賭けの性格があり、その見分け方が問題である。部下は上司の何を信頼し、その信頼に応えられない場合の許容限界の程度、一方昇進に対する基準の設定とともに、敗者の復活戦への努力、重要さも見逃してはならない。

第3章は情報下・個性化社会における人材の養成としては、速に社会情勢の変化に対応した決定を迅速にすること。多くの情報の中からの個人的な選択は個性

の強い人間によってなされ、また売れる商品としては付加価値のある個性的なものとなり、その技術開発における負担軽減策と財テクの重要性が強調される。

第4章は異端のすすめの本論となるが、先ず異端を唱えることを恐れず発想の柔軟化から常識も変えることもあるだろう。窓際族は過去の経営のしきたりの中からはみ出したもので、それなりの理由はあるとしても新しい社会の要請に応える可能性を潜在する該当者の溜り場とみることもできよう。独創性の必要性は云うまでもないが、それ以前に予測能力の教育が必要である。人間はそれぞれ長所と短所があるが、その判別はその環境に支配されるもので、短所を長所化するような雰囲気作りも人材開発の一つの方法である。

本書のいわんとするところは、ハイテク時代における社会情勢の急激な変化に対応するための発想で、以前には周期律表の中に使い道のない——ただ員数として申しわけ的に載っていた——元素が時代の変化に便乗し、クローズアップしそれぞれのもつ潜在的特徴を思う存分発揮し先端産業のパイオニアとして活躍しており、一方或程度の危険を自信と覇気によって不可能を可能にするような機能を推進したベンチャービジネスの急成長が、大企業の経営の基盤に肉迫して来た。そこで大企業といえども過去の実績と社会の評価に安閑としては居られず、また業種も現状の社名、老舗の内容とは無関係に以前には想像もされなかったような方向への進出の止むなき情勢に押し遣られていることに対する読み方として、過去を洗い流した新しい考え方、見方が企業の生き残りの一つの手段とみることもできよう。その暁には社名は単なる符号としての意味をもつものとなり、終局は戦前の銀行のように番号化してもよいのではあるまいか。

* 滋賀女子短期大学講師

〒567 高槻市日吉台1-15-17 (自宅)